

第3章 協働まちづくりでの地域内の動き

- 3-1. 大越協働まちづくりの概要
 - 3-2. 2009年度協働まちづくりプロセスの整理
 - 3-3. まちづくり実験のプロセス
- 小結

3-1 大越協働まちづくりの概要

大学と地域による大越協働まちづくりの概要を示す。大越の協働まちづくりの位置づけは1章で明らかにした。

3-1-1 大越のまちづくりの概要

大越地域での協働まちづくりは2009年度の調査・分析・基本方針の策定と、2010年度のまちづくり実験と、2011年度のフォローアップの3箇年計画からなる。大越地域全域を対象としたまちづくり活動として、「2009年度に大越地域の問題意識からの目的共有を図る」「2010年度に大越地域全域のまちづくりを目的とした活動を行う」ことを初めての試みとする。流れを図3-1に示す。本研究のケーススタディとして、大越地域での協働まちづくりを進めることでみえる地域内の動きに着目することで、大越地域のまちづくりのあり方に関する知見を得る。

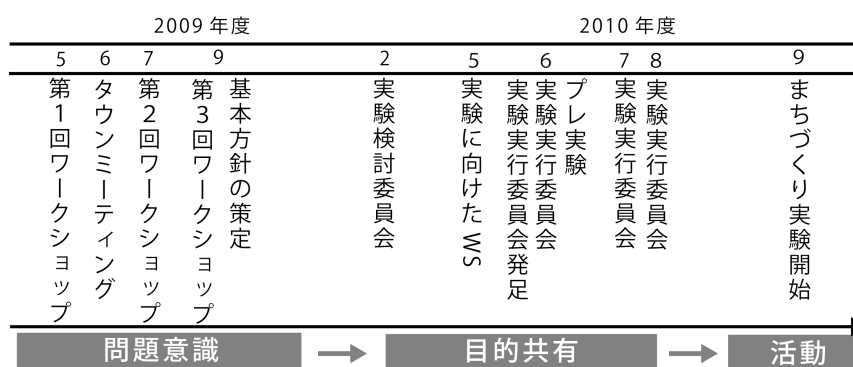


図3-1 協働まちづくりの流れ

■まちづくり主体

2009年度～2010年度にかけての地域と大学の協働まちづくりの主体の概要をまとめる。各主体の役割について明らかにする他、2009年度～2010年度の年度の変化によって各主体の構成メンバーの変化や求められる役割の変化があったことについても明らかにする。

1)大学

東京大学大学院空間計画研究室が田村市の委託研究として大越まちづくりに関わっている。主に2009年度の調査分析と基本方針の策定は修士課程1年生と研究員1名を中心に行った。2010年度のまちづくり実験では2009年度から関わる学生とUDCT職員で東京大学研究員1名が関わった。

2)UDCT（田村地域デザインセンター）

田村市、田村市行政区長連合会、東京大学が2008年8月に設立した公民学連携のまちづくりシンクタンクである。3つの構成団体（田村市、田村市行政区長連合会、東京大学）と、趣旨に賛同する協力団体（福島県三春土木事務所、栄町商工振興会、菅谷を明るく元気にする会、田村市商工会広域連携協議会、たむら農業協同組合）からなる。協力団体の中に含まれる栄町商工振興会は船引まちづくりに関わった組織であり、菅谷を明るく元気にする会は滝根まちづくりに関わった組織である。このように、協働まちづくりに関わった住民組織は協力団体となり、UDCTの今後の活動に関わるということを目指している。UDCT運営会議は年2回行われる。東京大学特任研究員1名と2名の常勤スタッフ（田村市臨時職員）が日々業務を行っている。協働まちづくりの資金管理はUDCTが行っており、各地域で同時に進行する主にまちづくり実験、フォローアップに対して支出をしている。週に1回、市プロジェクトチームと共に、UDCTのミーティングを開いている。



UDCT 外観



UDCT 運営会議の様子

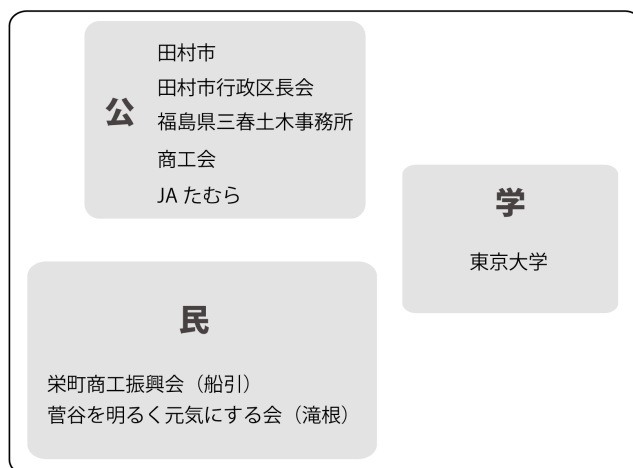


図 3-2 UDCT の構成

3)市プロジェクトチーム

市プロジェクトチーム（以下 市PT）は、田村市内の行政職員で構成される。2009年度は10名（建設部都市計画課5名・産業部商工観光課1名・市長公室1名・総務部企画課1名・大越行政局1名・滝根行政局1名）であったが、2010年度は入れ替わりが4名、新たに3名（建設部都市計画課1名・都路行政局1名・常葉行政局1名）が加入し13名となった（図3-3,3-4）。市PTは通常業務の傍らでこの協働まちづくりに関わっている。週に1回、UDCTで行われるミーティングでは、各地域の協働まちづくりの進捗状況などの情報共有を行っている。

市PTは行政職員は異動制を有するため、持続的に市PTに関わることが現状では不可能である。

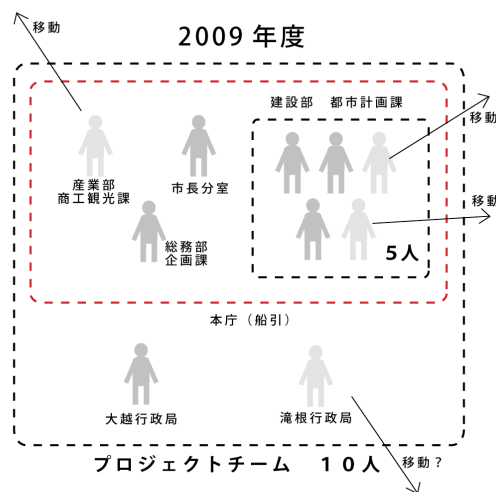


図 3-3 2009 年度 市 PT 構成

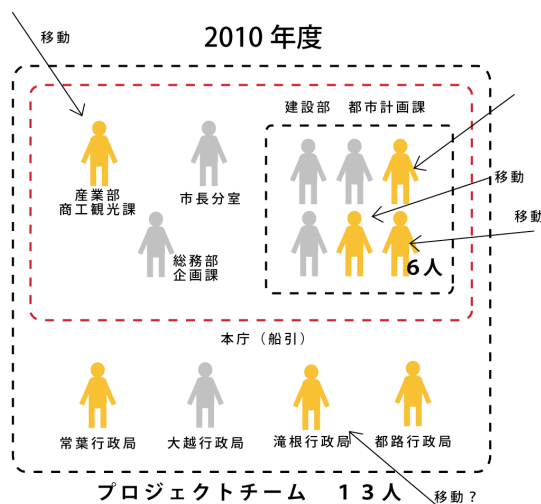


図 3-4 2010 年度 市 PT 構成

4)有志住民・住民まちづくり実行委員

2009年度にワークショップ3回・タウンミーティング1回を行う際に、大越行政局から情報をもらい、UDCTが選出した住民に案内状を郵送した。選出した住民は、住民団体（行政区副会長・大越町観光協会・大越町商工会女性部・大越町商工会青年部・牧野ひまわり会・鳴神華の会・我が里を考える会・田子屋地域づくり推進会）の代表である。2009年度のまちづくり活動に参加した住民と、参加しなかった住民がいる。2010年度6月の第1回まちづくり実験実行委員会からは、2009年度に案内状を送付した住民に加えて、各行政区長10名・教育委員会代表1名・市議会議員2名、2009年度まちづくりに参加した住民から紹介された住民3名に新たに案内を郵送した。2010年度6月からは実行委員会に参加した住民は実行委員（以下 住民委員）としてまちづくり実験に関わることになる。



第1回 まちづくり実行委員会



第4回 まちづくり実行委員会

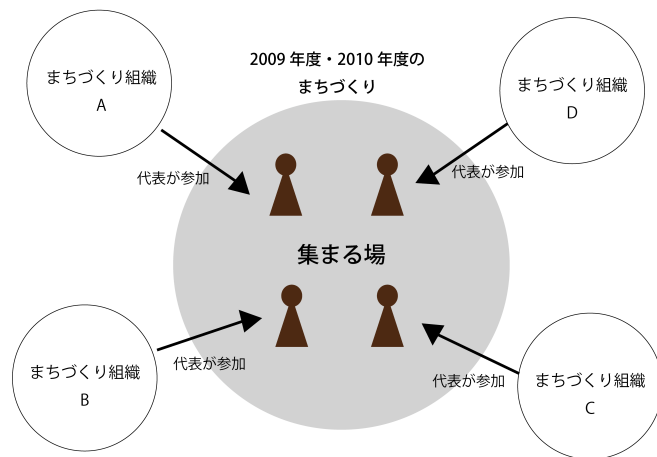


図 3-5 住民実行委員の選出

3-2. 2009年度協働まちづくりプロセスの整理

ここでは、2009年度と2010年度の計3回のワークショップ・タウンミーティング・まちづくり実験実行委員会・実験意見交換会のまちづくり活動と、2010年6月に発足したまちづくり実験実行委員会の計4回のまちづくり活動での地域内の行動力について明らかにし、分析をする。地域内の行動力は、住民・行政からの働きかけと、住民のまちづくり活動に参加するという行動があるかどうかで判断する。

3-2-1 ワークショップ・タウンミーティング・意見交換会からみる動き

2009年度第1回ワークショップから、2010年度のまちづくり実験意見交換会までの告知は、大越住民全戸に回覧板で知らせた。特定のまちづくり組織代表者に案内状を送付した。

	日時	名称	議題
1	2009年5月21日	第1回ワークショップ	大越地区の課題発見
2	2009年6月26日	タウンミーティング	1、田村市内5地域代表者による意見交換 2、大越地域の地域資源
3	2009年7月25日	第2回ワークショップ	まちづくりのアイデア出し
4	2009年9月25日	第3回ワークショップ	計画実行するための手法の検討
5	2010年2月2日	まちづくり実験検討会	まちづくり実験の提案に対する意見交換
6	2010年5月13日	まちづくり実験ワークショップ	実験の実施に向けた提案の意見交換

表 3-1 スケジュール

1)第1回ワークショップ

日時	2009年5月21日		
内容	大越地域の課題発見		
会場	大越行政局		
参加者	大学		
	UDCT 職員		
	市 PT		
	参加住民	案内状を送付した住民	8名
民	そのうち参加者	7名	



第1回ワークショップの様子

第1回ワークショップは、大越地域のまちづくり組織の代表者をはじめとする大越住民と、行政職員、東京大学が参加して行われた。大学と住民と行政の3者の顔合わせの場である。「生活」「産業」「観光」の3つのテーマについて課題と提案を出し合った。このワークショップは大越地域全域を対象とした住民参加の話し合いとしては初めてのものであった¹⁾。大学側は大越地域の問題点を把握する場となり、住民にとっては普段関わりのない住民と大越地域全域について考える初めての機会となった。

¹⁾巻末資料 2009年度まちづくり議事録 NO.1]より

告知は市 PT からの大越地域の情報提供のもと、UDCT から行った。告知の方法は、大越地域のまちづくり組織などの住民組織の代表者である 8 名に案内状を送付した。大学側は外部大学であるためにネットワークがなく、ワークショップの現場に行くまでに準備として、空間調査や文献調査を行った。当日に大越全域をみて回ったことを題材に、議論のもととなる発表準備を行った。ワークショップの場では大学が事前調査で把握した大越地域の概要や地域資源などの発表をしたあとに、参加住民が大越地域の問題点をあげた。タウンミーティングは、「大越全域規模の地域資源について初めて住民が意見出しを行った場」であると位置づけられる。

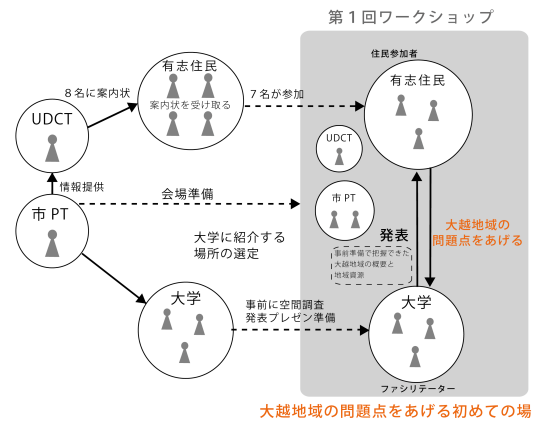


図 3-6 働きかけとそれによる行動

2)タウンミーティング

日時	2009年6月26日	
内容	1.田村市内5地域代表者による意見交換 2.大越地域の地域資源	
会場	大越行政局	
参加者	大学	
	UDCT 職員	
	市 PT	
	市長	
参加住民	案内状を送付した住民	8名
	そのうち参加者	5名



タウンミーティングの様子

船引・滝根・大越と3地区目の調査の節目として、船引・滝根・大越・常葉・都路でまちづくり活動を行う代表者をコメンテーターとし、田村市長参加のもと意見交換会を行った。まちづくり実験を最初に行った船引の成果発表や、各地区のまちづくりに関する話を出し合ったところ、地域内だけの地域資源をもとにした発信よりも、田村市内の地区間で連携していく必要があること、その連携をどのようにしたらいいのかといった意見が出た。また、大学が関わる協働まちづく

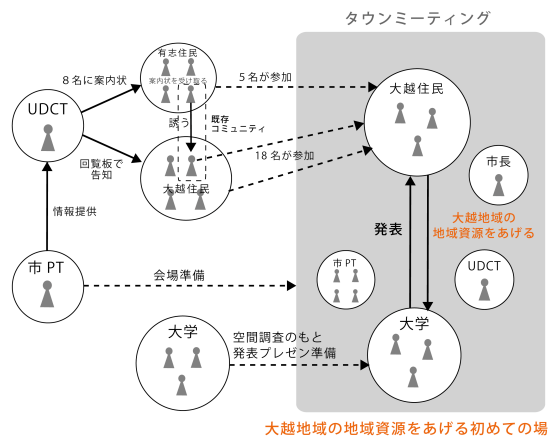


図 3-7 働きかけとそれによる行動

りをどう活かしていくか、という意見があった²。田村市となったからこそ生まれた外部からの視点として、貴重な意見交換の場であった。

また、大越地域の地域資源についての意見交換を行った。ここで大越住民と大学の動きについて着目する。まず大学側から調査によって得られた情報をもとに大越地域の景観資源についての発表を行い、それを受けた大越住民側から、1.大滝根川源流 2.高柴山 3.田園風景 4.駅周辺の環境 5.セメント工場跡地 6.ひまわり畑の風景 7.建築資源 の資源があがった。住民が認識している地域資源が多く挙げられたが、その中には問題点も同時に挙げられた。例えば高柴山は「山頂からの眺めが良い」「つつじの群生」と長所がある一方、「牧野口からの登山道の砂利道が歩きにくい」という短所も住民が認識している³。このことから、地域資源はあるが活かしていくには問題点があるといえる。タウンミーティングの告知は、UDCT による前回のワークショップ参加者への案内状の送付と、田村市内各戸への回覧板である。

タウンミーティングは、「大越全域規模の地域資源について初めて住民が意見出しを行った場」とであると位置づけられる。

3)第2回ワークショップ

日時	2009年7月25日	
内容	まちづくりのアイデア出し・アイデアカード作成	
会場	大越武道館（旧大越娛樂場）	
参加者	大学	
	UDCT 職員	
	市 PT	
	参加住民	案内状を送付した住民 8名
	そのうち参加者	5名
	その他参加者	1名



旧娛樂場でのワークショップの様子

旧大越娛樂場を活用し、アイデア出しを目的としたワークショップを行った。「生活」「産業」「地域資源」の3つのテーマについてアイデアカードを作成した。

まず、大学側から発表を行い、それを受けて住民側からは第1回ワークショップで挙げられたセメント工場跡地の問題や、高齢化の問題が出された。ワークショップ形式のアイデア出しでは、

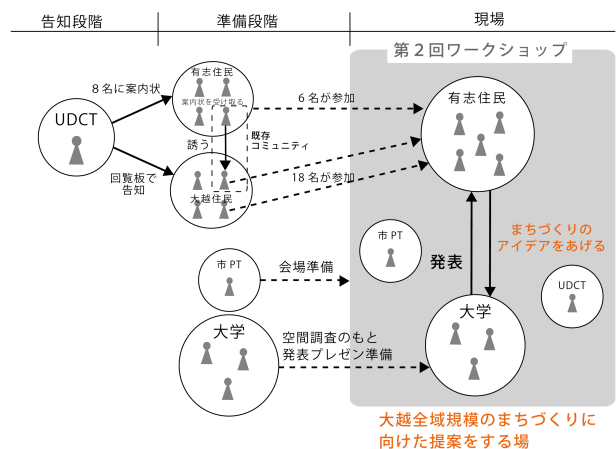


図3-8 働きかけとそれによる行動

² [巻末資料 2009年度まちづくり議事録 NO.2]より

³ [巻末資料 2009年度まちづくり議事録 NO.3]より

大越がもつ地域資源を活かした提案がされた⁴。

大学と UDCT からの提案により、旧娯楽場でワークショップを開催することに決定し、それを受けて市 PT が会場準備を行った。県道沿いにある旧娯楽場を活用した試みであり、通りすがりの参加者を期待してポスターを掲示したが効果はあまりなかった。始めの告知の段階で、まちづくりに興味を持っていた住民が参加した。

「大越全域規模のまちづくりに対する提案を初めて住民が行った場」とであると位置づけられる。

4)第3回ワークショップ (2009年9月25日)

日時	2009年9月25日	
内容	計画実行のための手法について検討	
会場	大越行政局	
参加者	大学	
	UDCT 職員	
	市 PT	
参加住民	案内状を送付した住民	8名
	そのうち参加者	5名
	その他参加者	1名



ワークショップの様子

大学側から提案した計画をもとに、その計画を実行するためにすべきことについて住民側が意見を出し合った。テーマは「駅」「娯」「農」「石」の4つで分かれ、「すぐやるべきこと」「3~5年後に始めるべきこと」「10年先に始めるべきこと」についてまとめた。そのテーマとは別に、ワークショップに参加する人数が少ないことを問題点として挙げられた⁵。

告知は、UDCTによって前回ワークショップ、タウンミーティングの参加者への案内状と回覧板を回した。大学側から初めて提案を行い、住民側から提案に対しての意見が出された場であると位置づけられる。

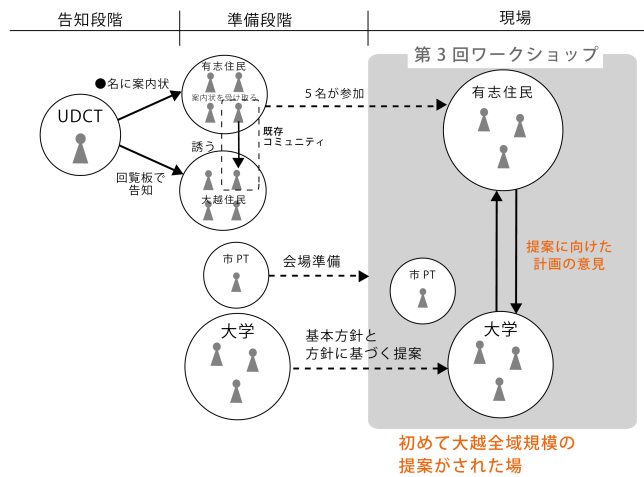


図 3-9 働きかけとそれによる行動

⁴ [巻末資料 2009年度まちづくり議事録 NO.4]より

⁵ [巻末資料 2009年度まちづくり議事録 NO.5]より

■基本方針の策定

大越まちづくりの基本方針は「大越が持つ資源の価値を共有し、つなげるまちづくり」でとし、地域資源として5つのキーワードの「農」「石」「駅」「娯」「人」を提言した。具体的には、①「農」 「田園風景」の保全・活動 ②「石」 「石灰資源」の活用と発信 ③「駅」 移動交通の充実と「大越駅」などの拠点地区のまちづくり ④「娯」 地域文化交流の中心としての「大越娯楽場の再生」 ⑤「人」大越のまちづくりに関わる「人」の思いと活動の連携である。5つのキーワードをもとに細かい提案も行い、2009年9月の中間発表では住民に発表を行った。中間発表後は、2010年度のまちづくり実験の実施に向けて、この5つのキーワードをもとにした提案を行った。



図 3-10 5つの地域資源のキーワード

5)まちづくり実験検討会

日時	2010年2月2日	
内容	まちづくり実験に向けての意見交換	
会場	大越行政局	
参加者	大学	
	UDCT 職員	
	市 PT	
	参加住民	案内状を送付した住民
	そのうち参加者	4名
	その他参加者	1名



まちづくり実験検討会の様子

大学側から、「農」「娯」「石」「駅」「人」について提案を行った。参加者が少なかったため、住民一人一人の考え方がよく表れた。住民参加者は、まちづくり組織代表者3人と、大越代表区長の合計4人であった。大学と協働でまちづくりを行う機会を無駄にしたくない、という意見と、行政の力を活かしたいという意見が多くあった⁶。大学側からの提案の中で、何が実現できるのかと意見を求めたところ、農業体験・民泊体験に対して積極的な意見があった。意見の出し合いではあるが、住民が順番に大学側に意見を出すかたちであり、それに大学が答えるという形で、大学側と住民の意見交換の場であり、住民同士で話し合う場というものではなかった。市 PT メンバーのまちづくり実験に対する意見も積極的に出され、これまでのワークショップにはなかった動きである。

⁶ [巻末資料 2009年度まちづくり議事録 NO.5]より

告知はワークショップとタウンミーティング参加者に送付した案内状と大越地域各戸への回覧板で行った。平日開催であったためか参加者が、ワークショップとタウンミーティングに毎回のように参加するまちづくりに対して意識の高い住民に絞られた。

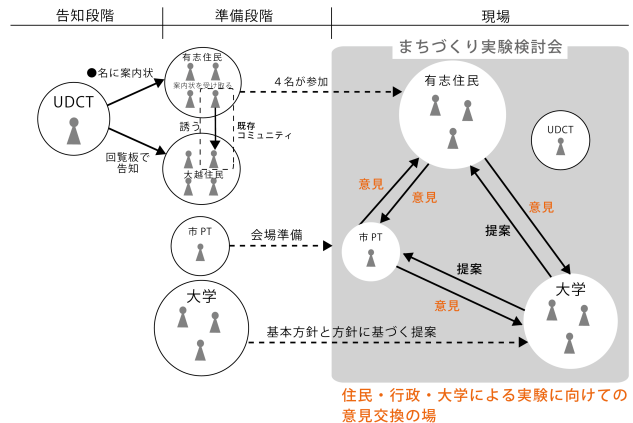


図 3-11 働きかけとそれによる行動

6)まちづくり実験ワークショップ

日時	2010年5月13日	
内容	実験の具体的な提案に向けての意見交換 ①民泊体験 ②娯楽場の活用 ③マラソン大会	
会場	大越行政局	
参加者	大学	
	UDCT 職員	
	市 PT	
	参加住民	案内状を送付した住民
	そのうち参加者	4名
	その他参加者	1名



まちづくり実験ワークショップの様子

テーブルごとに分かれ、具体的提案を実施するための計画について意見交換を行った。住民参加者が多く、議題も豊富であった。民泊体験、娯楽場の活用に関しては大学側から2009年9月からまちづくり基本方針からの提案によって触れていたものであったが、マラソン大会については初めての提案であった。大学とUDCTがワークショップの事前に話し合いを重ねた具体的な提案だったことから学生側からの主張も強く、住民からも多くの意見がでる活発な意見交換の

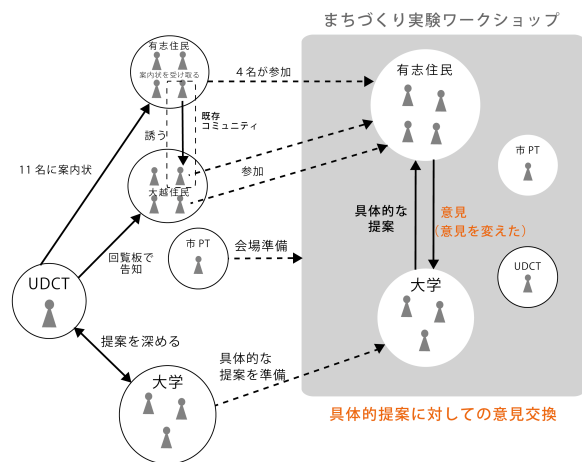


図 3-12 働きかけとそれによる行動

場であった⁷。後のヒアリング調査によると、住民の1人は、このまちづくり実験ワークショップの中の“娯楽場での活用”に向けての意見交換の時に、大学側の積極的な積極的な意見を聞いたことで娯楽場の活用に否定的だった考え方を変えたとしている。

場所、方法、プログラムについて住民からアイデアがでたことで、大学側もその後の提案を深く詰めることができた。

分析 ワークショップとタウンミーティングの過程から(2009年5月~2010年5月)

各主体の動きと動きによる変化

1)大学の動き

9月の中間報告を兼ねた第3回ワークショップで初めて大越地域全域規模のまちづくりの提案を行った。それまでは住民と市PTに対して提案などによる働きかけはなかった。大学で決定していた当初のスケジュールに従って、まちづくり実験に向けた具体的な提案を深めるにつれ、提案を通じて住民に対して積極的な働きかけをすることが可能になったといえる。動きによって変化したこととして、住民のまちづくりの提案に対する否定的な考え方を変えたことがあげられる。

2)住民参加者の動き

初回ワークショップを除き、大越全域の住民に回覧板を通して告知をしたが、ワークショップとタウンミーティングを重ねるごとに参加住民が増えることはなかった。案内状を送付した特定の住民に関しては、継続して参加する住民が多かった。

3)市PTの動き

市PTは、ワークショップとタウンミーティングの際に、行政局や大越武道館などの会場準備が主な役割であった。ワークショップとタウンミーティングでは、意見を言うのは住民がほとんどであり、市PT側から積極的な意見があるのは、住民参加者が少なかったまちづくり実験検討会のみであり、住民参加者が多い場では意見を出さない傾向がある。市PTからの積極的な動きはなかったといえる。大きな動きはなかったことから、それによる変化もなかった。

まとめ

大学側からの意見や提案がない時期においては、住民・市PTともにまちづくり活動に対しての動きはなかった。2009年5月から2010年5月までの、大越全域の問題意識からの目的共有期では、大越全域の問題は解決が困難である社会的な問題が多くある中、住民には問題解決に向けて何から手を付けていいのかわからない状態であったのではないかと考える。

⁷ [巻末資料 2009年度まちづくり議事録 NO.7]より

3-2-2 まちづくり実験の実施に向けてのプロセスの中での動き

大越まちづくりの基本方針から、①「農」「田園風景」の保全・活動 ②「石」「石灰資源」の活用と発信 ③「駅」移動交通の充実と「大越駅」などの拠点地区のまちづくり ④「娯」地域文化交流の中心としての「大越娯楽場の再生」 ⑤「人」大越のまちづくりに関わる「人」の思いと活動の連携という提案を行い、その提案に基づくまちづくり実験内容を大学側が中心となって具体的に企画を行っていった(図3-13)。まちづくり実験では、まちづくり実験実行委員会を立ち上げ、大学と地域の連携体制による実験イベントの開催をするという形をとった。

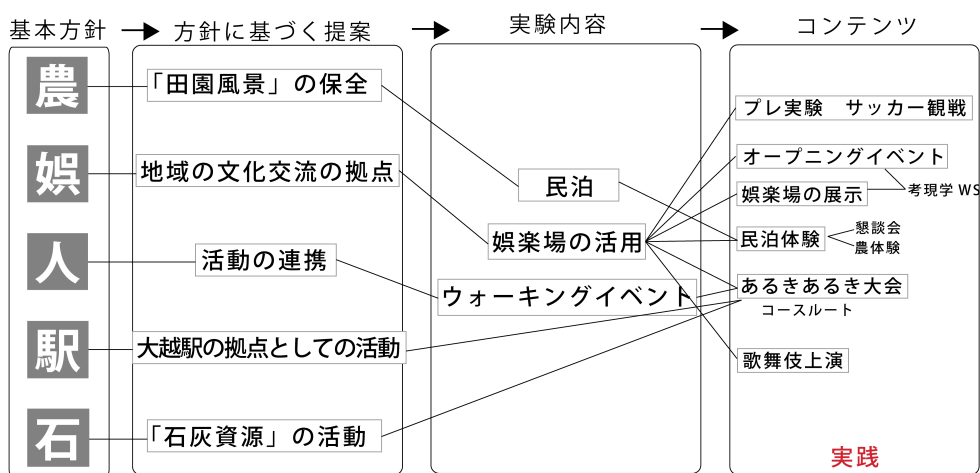


図 3-13 地域資源と実験提案への結びつき

	日時	名称	議題
⑦	2010年6月19日	第1回 まちづくり実験実行委員会	実行委員会発足・実験の実施に向けての意見交換 ①民泊体験 ②娯楽場の活用 ③大越あるきあるき大会
⑧	2010年7月26日	第2回 まちづくり実験実行委員会	①民泊体験②娯楽場の活用 ③大越あるきあるき大会 住民委員担当者決定
⑨	2010年8月7日	第3回 まちづくり実験実行委員会	まちづくり実験の内容を詰める・考現学ワークショップの試し
⑩	2010年8月7日	第4回 まちづくり実験実行委員会	大越あるきあるき大会の参加呼びかけの依頼

表 3-2 まちづくり実験実行委員会のスケジュール

8)第2回まちづくり実験実行委員会

日時	2010年7月26日		
内容	①民泊体験②娯楽場の活用③大越あるきあるき大会の実験における 住民委員担当者決定		
会場	大越行政局		
参加者	UDCT 職員		
	市 PT		
	参加住民	案内状を送付した住民	22名
		そのうち参加者	6名
その他参加者		0名	

参加者は大学側の学生はおらず、UDCT 所属の研究員1人と住民委員であった。UDCT から告知のための案内状を送付する人数が前回実行委員会から1人増えたのは、住民本人から依頼があったからである。実験することが決定した「民泊体験」「娯楽場の活用」「ウォーキング」の担当者を住民委員の中で決定した。大学が地域外部であるため、実行委員会を頻繁に行うには UDCT のような地域内の中間組織の存在が多いものと考えられる。「民泊体験」の担当者であるまちづくり組織代表の H 氏、S 氏には、大越民家で受け入れ可能な5軒を探すこと、「ウォーキング」の担当者であるまちづくり組織代表の S 氏含め2人にはコース途中のポイントにて見どころの説明することが求められた。「娯楽場の活用」担当者である観光協会代表 E さんには具体的な役割は示されなかった。

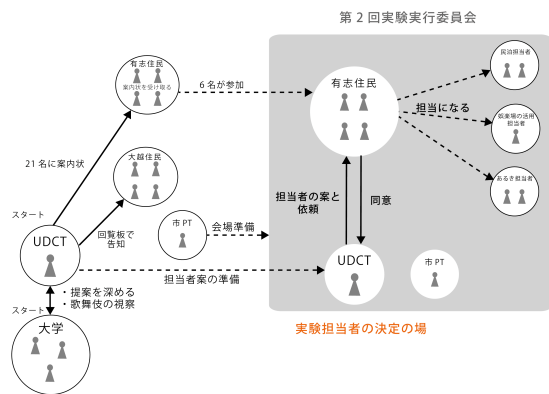


図 3-15 働きかけとそれによる行動

「娯楽場の活用」担当者である観光協会代表 E さんには具体的な役割は示されなかった。

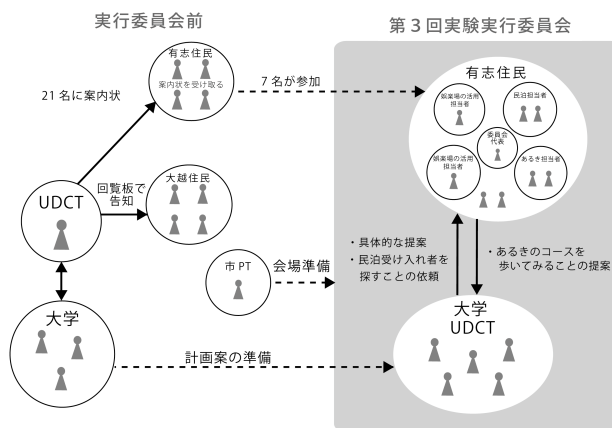
大越まちづくり実験実行委員会				
総括	大越代表区長（第1回実行委員会にて決定）			
実験内容	民泊受入1 (上大越・5組)	民泊受入2 (牧野・5組)	娯楽場活用	ウォーキング
リーダー	Hさん (鳴神華の会)	Sさん (牧野ひまわり会)	Eさん (観光協会)	Sさん+Sさん (我が里を考える会)
役割	受入れ者公募と同時に、 会で5軒の受入れ民家を探す。	受入れ者公募と同時に、 会で5軒の受入れ民家を探す。		コース途中のポイントで会の方に見どころの説明をする。

表 3-3 決定した住民委員の担当と役割

9)第3回まちづくり実験実行委員会

日時	2010年8月7日	
内容	まちづくり実験の内容を詰める・考現学ワークショップの試し	
会場	大越武道館（旧大越娛樂場）	
参加者	大学	
	UDCT 職員	
	市 PT	
	参加住民	案内状を送付した住民
	そのうち参加者	7名
	その他参加者	0名

2010年9月4日から始まるまちづくり実験の最終確認と、「民泊体験」「大越あるきあるき大会」の内容を詰めること、また7月末に大学側が行った檜枝岐歌舞伎上演者との打ち合わせ報告を目的として開催した。UDCTからの案内状の送付先が前回委員会から2人増えたのは、実行委員長からの依頼によるものである。大学側で具体的に計画を行ったことをもとに話し合いを進めた。民泊の受け入れ先が見つからないことが問題点としてあげられ、大学側から住民委員に民泊受け入れ者を探してもらうように依頼した。あるきあるき大会コース提案もされ、一度歩いてみようという意見が出された。また、オープニングイベントのコンテンツとして企画している「考現学ワークショップ」を試験的に実行委員会で行った。



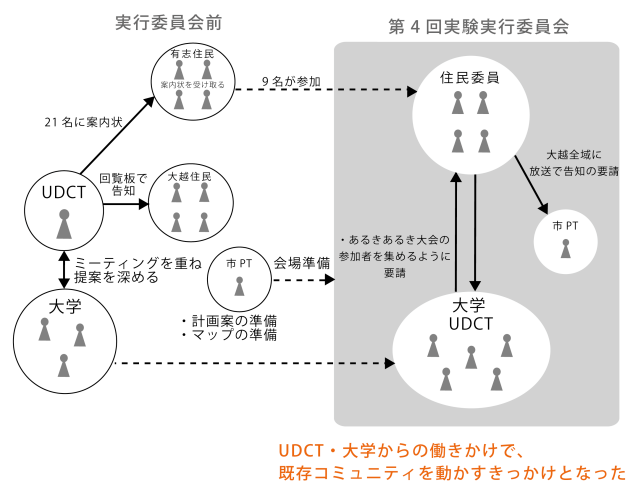
大学からの具体的提案に対して、住民から提案がされた場

図 3-15 各主体の働きかけとそれによる動き

10)第4回まちづくり実験実行委員会（2010年10月14日）

日時	2010年10月14日	
内容	大越あるきあるき大会の参加呼びかけの依頼	
会場	大越行政局	
参加者	大学	
	UDCT職員	
	市PT	
参加住民	案内状を送付した住民	不明
	そのうち参加者	不明
	その他参加者	0名

2010年10月24日に開催予定の「大越あるきあるき大会」の事前申込者が少ないこと、大越町文化祭と日程が重なっているため参加者が少ないと予想されることから、住民委員にまわりに参加を呼びかけてもらうこと、またオープニングイベントと民泊体験を終えての中間報告を行った。実行委員会の実施が直前に決まったことから、大学側の学生は2名のみの参加となった。第1回～第3回の実行委員会に参加していない住民が参加したことで、実験がまちづくりに結びつくのかという根本的な話も挙げられた。それを受けて住民委員は、「良い発見はできないかもしれないが、やってみないと分からない、やってみよう」という意見や、「地元で頑張るべき」といった積極的な意見があった⁹。また、オープニングイベント翌日に行われたあるきあるきのコースを歩いた際¹⁰のことにも触れ、「実際に歩いてみたことで新たな発見があった」と住民委員が言った。



UDCT・大学からの働きかけで、既存コミュニティを動かすきっかけとなった

図 3-16 各主体の働きかけとそれによる動き

⁹ [巻末資料 2009年度まちづくり議事録 NO.10]より

¹⁰ 2010年9月5日に、ひまわり会代表S氏、華の会代表H氏、我が里を考える会代表S氏、会員S氏、市PTのA氏、K氏が参加してあるきあるきのコース下見を行った。事前に、我が里を考える会員S氏がコース案を考えていた。

また、この実行委員会までに大学側が提案したあるきあるき大会について否定的な意見をもっていた S 氏であったが、この実行委員会で「やってみることが大事だ」と前向きな考え方に変わったということが後のヒアリング調査で明らかになった¹¹。

この第4回実行委員会で UDCT から参加者を集めるように住民委員に呼びかけたことで、参加者が事前申込み者がこの日を境に増加したということが、市 PT へのヒアリングにより明らかになった¹²。

11)その他打ち合わせでの動き

実行委員会以外でも、必要に応じて設けた打ち合わせの機会でも、各主体の動きがあった。動きがあった民泊体験の最終確認と、あるきあるき大会の打ち合わせの2回について取り上げる。

1. 民泊体験 最終確認（2010年9月4日）

参加者 民泊受け入れ先

オープニングイベント開催前に、民泊受け入れする住民を集めて最終確認を行った。実験当日の行程と、参加者と受け入れ先の決定をした。行程に関しては、事前に決められていた鳴神城址での食事会で必要な準備物を住民が用意することになった他、市 PT から滝根で行われる「田村ふれあい郷土芸能祭」¹³へ行くことの提案がされた。

2. あるきあるき 打ち合わせ（2010年9月13日）

参加者 大学 学生、市 PT K 氏、S 氏

あるきあるき大会のコースの確認と事前準備物の確認をするために打ち合わせを行った。大学側から提示したコースに対し、市 PT 側から意見が出され、それをもとに民泊体験当日にコースの最終確認をすることとなった¹⁴。船引ではタウントレイル実験を行ったことがあり、市 PT はタウントレイル実施の際の経験をもとに準備物や、当日行程などの提案を大学側にした。

¹¹ 住民委員へのヒアリングから[巻末資料 ヒアリング NO.26 より]

¹² 田村市職員へのヒアリングから[巻末資料 ヒアリング NO.22 より]

¹³ 2010年9月18・19日にあぶくま洞で開かれた初めての祭り

¹⁴ 民泊1日目に、学生が最終コース案をもとにコースの最終確認を行った。

分析 まちづくり実験実行委員会と打ち合わせから(2010年6月~2010年10月)

各主体の動きと動きによる変化

大学の動き

まちづくり実験にむけて、大学側から具体的な提案を行った。実行委員会以外では住民委員の意見を聞く機会がないために、実行委員会では住民委員にわかりやすいように資料を作成した。その働きかけがあったことが、住民の提案に対する意見が活発に出されるようになった要因であると考えられる。

住民委員の動き

大学側からの具体的な提案があったことで、提案に対しての改善策や反対意見が出されるようになった。会議の中では、住民委員と大学が意見交換をする場面が多くあり、住民同士の意見交換の場ではなかったといえる。

市 PT の動き

実行委員会においては、市 PT が意見する場面はほとんどなかった。しかし、実験に向けての準備物についての確認のやり取りを、実行委員会の後に大学側との電子メールや電話、UDCT 運営の場において行っていた。

まとめ

具体的な提案によって、住民委員からの提案がされるようになった。また、市 PT は行政の立場での役割を探し出したといえる。2009年度のワークショップの際の議題よりも、次に行うプロセスが大学側にとっても、住民委員・市 PT にとっても明確であったといえる。

3-3. まちづくり実験のプロセス

実験が開始される以前は、当初は住民・行政による積極的な動きがなく、まちづくり実験に向けての提案がされるうちに、意見が多く出された。3-2では、住民・UDCT・大学・行政が集まる場においての一つ一つの動きをみているが、ここでは、2010年度のまちづくり実験における提案、計画、実施までのプロセスの整理から「大学の動き」「住民の動き」「行政（市PT）の動き」を捉える。また、「実験参加者の動き」をみる。実験参加者は、まちづくり実験に自由参加であるのに対し、参加したという行動、またアンケート結果により「行動力をもたらした原因」「行動したことで得られたこと」について明らかにし、分析を行う。

3-3-1 娯楽場の活用① プレ実験 サッカー観戦

実験内容

「娯楽場の活用」のまちづくり実験として、2010年6月19日（土）に住民を集めてサッカー観戦を行った。プレ実験実行日が「2010FIFA ワールドカップ日本 VS オランダ戦」と重なっていたことから企画した。当日は48名の住民が参加した。実行主体は、大学、UDCT、市PTであり、プレ実験の準備期間にはまちづくり実行委員会は発足されていないため、関わっていない。プレ実験同日に実行委員会は発足され、住民も委員となった。

実験目的

9月からのまちづくり実験本番の前に、娯楽場を活用し音響などの設備環境を検証するため。



プレ実験 サッカー観戦の様子

参加者の分布

48名の参加があり、住まいは、上大越 32名、下大越 4名、牧野 6名、栗出 3名、早稲川 3名であった。娯楽場付近に住む参加者の割合が多いことがいえる。

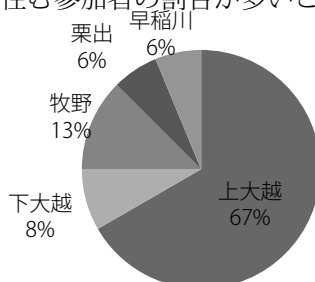


図 3-17 参加者の住まい分布

実験までのプロセス

1. 提案から検討

2009年度から娯楽場でワークショップを開催したこともあり、娯楽場の活用に関する実験を行うことはすぐに決定したが、コンテンツがすぐに決まらなかった。学生の間で話し合いを重ね、娯楽場活用の実験の本番を行う前に、試験的に映画を上映することが決定した。映画上映と同時に住民まちづくり実行委員を募集することにして、今後のまちづくり実験の土台づくりを行うと考えた。

2. 実施計画

実行委員募集、プレ実験参加者募集のために回覧板で配るチラシを作成した。6月1日に配布予定であり、それまで学生側ではコンテンツが決定できていなかった。先生がオランダ戦の日であることに気づき、多くの人に参加してもらうために急遽パブリックビューイングを開催することに決定した。6月に入り、実施計画が急速に進められた。市PTとUDCTが、スクリーン、チューナーなどの準備を行った。学生は合わせて行われる実験実行委員会のための資料を作った。

3. 実施

会場準備を、市PT、学生、UDCTで行った。はじめに、学生によるこれまでの協働まちづくりの報告を行った。サッカー観戦が始めると娯楽場に人が増えていき、2009年度からのまちづくり活動ではみられなかった若い人が集まっている光景が新鮮であった。

実験に参加するという動き

実験参加者は、まちづくり実験の主催者でなく、役割も決まっていなかったために、参加することが義務づけられていない。参加自由な中で48名の住民の行動がみられた。プレ実験の計画は、まちづくり実験実行委員会発足前から行われていたことであるため、プレ実験実施までのプロセスからは、住民からの動きはみられない。

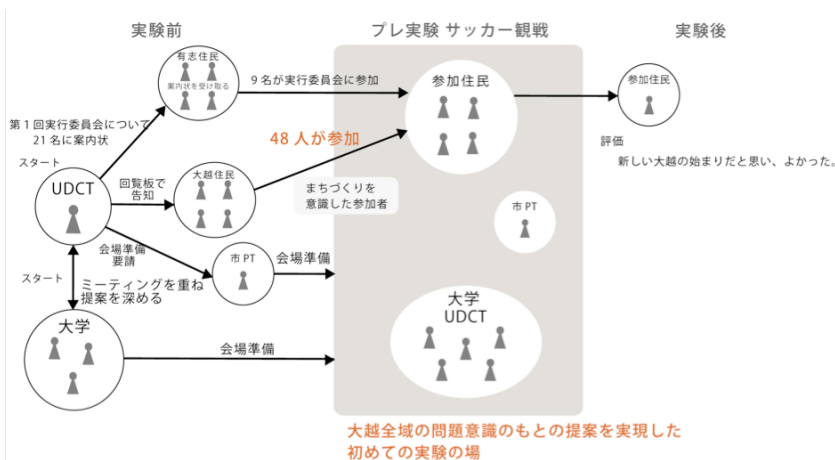


図 3-18 各主体の働きかけ

3-3-2 娯楽場の活用② オープニングイベント

実験内容

2010年9月4日（土）に、大越まちづくり実験2010のオープニングイベントを旧娯楽場で開催した。内容は鬼太鼓上演、考現学ワークショップ、Tサロン、娯楽場今昔物語展の展示である。鬼太鼓は、大越の伝説「鬼五郎幡五郎伝説」に基づいた、約20年続く創作和太鼓である。考現学ワークショップは、娯楽場の魅力を伝える目的で行う娯楽場今昔物語展の一環として行うものである。娯楽場設計者である今和次郎が提唱した考現学に習い、大越のまちの中で面白いと感じたものをスケッチするという企画であった。スケッチしたものは、後日に今昔物語展の一部として展示する。ワークショップは、前半に「娯楽場」、後半に5つのグループに分かれ、「駅」「河川」「引き込み線」「公民館」「小学校」のイラストを描いた。Tサロンではという語り場では考現学ワークショップで描いたイラストの発表会を行った。イラストをスクリーンに移しながら、小学生が絵の内容について説明をした。娯楽場今昔物語展では、娯楽場の歴史、内観模型、外観模型の展示を行った。

実験目的 娯楽場を活用すること、まちづくり実験の初日として多くの参加者に興味をもってもらい、今後の実験参加者を増やすこと。

実行主体

大越まちづくり実験実行委員会（学生、UDCT、市プロジェクトチーム、住民実行委員）

協力

大越町和太鼓保存会

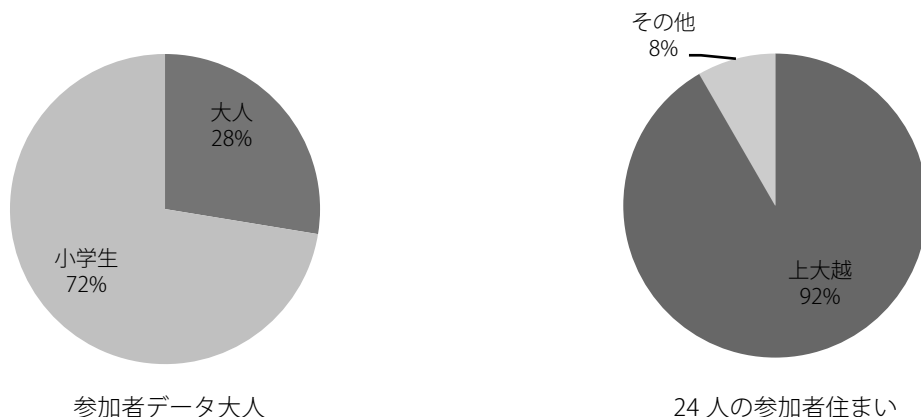


オープニングイベントの様子



大越娯楽場今昔物語展

参加者 87人 (大人24人 小学生63人) (上大越85人、船引1人、三春1人)



小学生の参加が72%が多かった。大人参加者24名のうち、旧娯楽場のある上大越の住まいの住民が殆どであった。上大越小学校に通う小学生の参加が殆どであったことから、その小学生の保護者の参加があったものと考えられる。

実験までのプロセス

1. 提案検討

オープニングイベントとして、娯楽場で企画を行うことが学生、UDCTの間で決定した。

2. 実施計画

第1回実行委員会の際に、コンテンツとして、三匹獅子舞と鬼太鼓上演の話が住民委員から出された。呼びかけにより、鬼太鼓上演が決定した。三匹獅子舞は都合が合わなかった。娯楽場の展示企画で案が出た「考現学ワークショップ」は、「大越探検隊」と名を改め、開催することにした。住民が楽しめる企画にするにはどうすべきか、と議論を学生、UDCTの間で議論を重ねた。8月に行われた第3回実行委員会で、実行委員だけで行ってみることにした。8月の考現学ワークショップでは、あまり実施目的が伝わらないまま行ってしまったが、描いてもらったイラストは面白く、展示内容としての手応えを感じた。考現学の面白さをどう伝えるか、住民が楽しく参加できるようにするためにはどうしたらいいのか、という議論はオープニングイベント直前まで続いた。小学生を呼んだら盛り上がるのでは？と意見が市PTから出され、小学生向けポスターを作成して呼びかけた。夏休みを利用して、学生は展示準備をした。内観模型、外観模型、娯楽場の歴史説明パネルの制作を行った。

3. 実施

会場準備を、市PT、学生、UDCTで行った。学生は時間までの間、後日実施する「民泊」のミーティング、娯楽場のインタビューを行っていた。開場時間になると、予想以上に小学生参加が多く賑やかとなった。

各主体の動き

実験までのプロセスをまとめると、地域内の実験成功のための自主的な動きがあったと考えることができる。

大学からの動き 日程決定、オープニングイベントの日程決定を行った

住民委員からの動き オープニングイベントのコンテンツの提案

行政（市 PT）の動き 小学校への参加呼びかけ

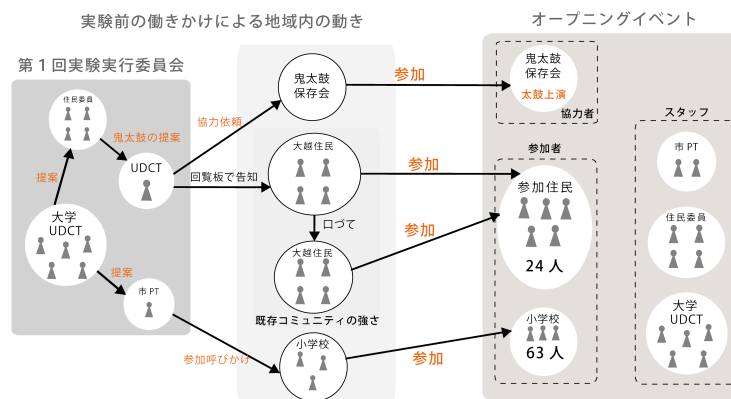


図 3-19 主体による働きかけとそれを受けた動き

まとめ

市 PT から小学校に参加を呼びかけたこと、住民委員の提案により、鬼太鼓保存会に協力依頼をしてコンテンツが決定したといえる。